

師匠譲り。文枝さんはもともと、趣味の踊りを習おうと、落語界に入っている。音曲入りにぎやか、はんなりとした色気のある芸風は、他者にはまねできないものだった。

小枝が選んだ「小倉船」は、文枝さんが駆け出し時代に得意としたネタだ。小枝は「ずっと耳に残ってるし、影響もあるかも」。いや、これは照れだろう。間違ひなく、心中に師匠がいてる。